

聖書：コリント人への手紙第一 1：4～9

説教題：神は真実です

日時：2022年1月2日（朝拝）

先週からコリント書第一を開いて今日は2回目となります。今回は当時の手紙の形式に沿った最初の部分、差出人・宛先・挨拶に当たる部分を読みました。それに続く今日の箇所は、これまた当時の手紙の一般の形式に見られる感謝を述べる部分となります。さてコリント教会の現状を考えるなら、このパウロの言葉は驚くべきものではないでしょうか。前回少し見ましたように、コリント教会は問題の多い教会でした。分派の問題もありましたし、不道德の問題もありましたし、ここを訪れた人は「果たしてここは教会か？」と思うような多くの問題がありました。そんな彼らが前回の2節で「神の教会」とか「聖なる者たち」と呼びかけられたこと自体、驚きでした。その彼らにいよいよ今日の箇所から厳しい言葉、苦い言葉が語られるのではないかと予想するところですが、何とその彼らについてパウロは感謝の言葉をここに記すのです。

まず4節で彼はキリストにあって与えられた神の恵みのゆえにコリント人たちのことをいつも神に感謝していると述べます。今日のメッセージのポイントに関わる大事な点ですが、パウロはここでコリント人たちに感謝したのではありませんし、あるいは彼らを素晴らしいと称賛しているのでもありません。パウロの感謝は「神に」向けられています。神がキリストにあってコリント人に救いを与えてくださり、その恵みに生かしてくださっていることを覚えて神に感謝をささげています。

5節では特に彼らの「ことば」と「知識」が取り上げられています。「ことば」はスピーキングに関わるもの、すなわち教えること、証しすること、説明すること、預言すること、説教すること、その他、口から出す言葉と関わる活動のことでしょう。一方の「知識」は理解力、洞察力、識別力、知恵等と関わるものでしょう。この「ことば」と「知識」に関して、この手紙を読む中で分かることは、まさにこれらにおいてコリント教会には問題が生じていたということです。コリント教会のメンバーには知識を誇ったり、雄弁術において誰が勝っているか、争い合う傾向があったようです。次回見る12節に記されている通り、彼らは「私はパウロにつく」「私はアポロに」「私はケファに」「私はキリストに」などと言って互いに対立していました。また後の8章1節でパウロは偶像にささげた肉の問題を扱うところでこう言います。『私たちはみ

な知識を持っている』ということは分かっています。しかし、知識は人を高ぶらせ、愛は人を育てます。」ここからコリント教会のある人たちは、自分は知識を持っているということで高ぶっていたことが伺えます。このようにコリント教会の問題の火種になっていた「ことば」や「知識」をわざわざ取り上げて、それを感謝するなどパウロは述べるとは一体どういうことか。これは皮肉なのかとある人たちは問います。しかし私たちはここに大切な視点を教えられます。それは確かにことばや知識を巡ってコリント教会には問題が生じていましたが、悪いのはそれらの賜物ではないということです。賜物は良いものです。それは神がくださった祝福です。悪いのは賜物ではなく、その賜物を使う人の態度、その使い方でしょう。それを授けられた意図を間違えて捉えて、自分を誇るため、自分の栄光のために使っていることが問題でした。その問題についてパウロは後で論じます。しかしその前にパウロはここで、神がくださった良いものについて感謝しているのです。言い換えれば、これらは正しい方向へと方向づけられれば良いものとして用いられるということです。神のご計画前進と教会の祝福のために肯定的な効果をもたらすものとなる。その賜物を授けてくださった神を見上げてパウロは感謝をささげています。

6 節に「キリストについての証しが、あなたがたの中で確かなものとなったからです」とあります。これはパウロたちのコリント宣教を振り返った言葉と思われます。「キリストについての証し」とはパウロたちの福音宣教のことです。その証を聞いてコリント人たちはキリストを信じ、そのキリストに結ばれた彼らに、今見た様々な恵みが与えられました。つまり彼らが受けた色々な恵みは「キリストについての証し」、すなわち福音がコリント人たちに受け止められ、彼らの中に根を下ろしたことの確かな証拠でもあったわけです。

そして7節には「その結果、あなたがたはどんな賜物にも欠けることがなく」と言われています。彼らはキリストを信じて、5節で言われた通り、「すべての点で、・・・豊かな者とされ」ました。そして「熱心に私たちの主イエス・キリストの現れを待ち望むようになっています」と言われています。ここに救いを受けた彼らではあるものの、その完成はなお将来にあることが言われています。私たちが受ける救いには過去と現在と未来の側面があります。イエス・キリストを信じて「救われた」と過去形で語ることもできますが、今現在、救いのプロセスのただ中を進んでいるという意味で「救われつつある」と現在進行形で語ることもできますし、最終的に救われるのは「こ

れから」であるという意味で未来形で語ることもできます。これはこの後、コリント人たちへのメッセージにおいて重要になります。先に触れたように、彼らの中のある人たちは誇っていました。私のことばや知識の方が優れているとか、私たちが推すリーダーの方が他より勝っていると主張して争っていました。しかしクリスチャンのゴールはまだ先にあるのです！その目標を見失って、今どっちが勝っているとか、どっちが劣っているなどとやり合うのは愚か過ぎる姿ではないかということです。自分たちは救いの途上にある者たちであり、まだまだ成長・前進して行かなければならない者たちです。だとしたら人と比べて多少勝っていると言って自己満足にふけている場合ではなく、むしろ身を低くしてひたすら主が与えてくださる恵みを待ち望んで歩むべきではないか。なお先にあるものを見つめて歩むべきではないか。その基本姿勢を確認するものともなっています。

さてコリント人たちの姿を見て神に感謝したパウロは、8～9節で彼らの将来に対する確信を述べます。まず8節：「主はあなたがたを最後まで強く保って、私たちの主イエス・キリストの日に責められるところがない者としてくださいます。」少し細かいですが、メッセージに関わる部分ですので、なるべく簡潔に説明しますが、冒頭の「主は」という部分は「神は」と訳す方が良いと思われます。原文の8節冒頭は「この彼は」という表現で始まっていて、誰を指すかには解釈の余地があります。新改訳は直前の7節に出て来たイエス・キリストを指すと解釈して「主は」と訳したようです。しかし4～8節までは一続きの文章で、これは神にささげられている感謝です。評価の高い多くの注解書はここは「神」を指すと理解すべきであると述べています。新改訳も欄外8に別訳として「神も」と記していて、「神」と訳すべき可能性を示しています。また2点目としてそこに「神も」と記されていて、「も」と訳すべき言葉が原文に含まれていることを示唆していますが、「も」のつける場所が違うと考えられません。原文の意味はこうだと考えられます。パウロは今、コリント人たちに関することで神に感謝をささげています。特に彼らが福音を信じて、多くの恵みを与えられたことについて感謝しました。それに加えてパウロはこの8節で、神は彼らを最後まで強く保つこと「も」してくださると言っているのです。最初の時点で彼らを救いへ導き、様々な賜物を与えて信仰生活をスタートさせたばかりでなく、最後まで強く保つこと「も」してくださる。初めだけでなく、終わりまで支えることも！というニュアンスです。ピリピ人への手紙1章6節：「あなたがたの間で良い働きを始められた方は、キリスト・イエスの日が来るまでにそれを完成させてくださると、私は確信していま

す。」 コリント人たちの間で良い働きを始めた神は、そのゴールに至るまで導いてくださいます。とりあえず始めてみて、途中でそれを投げ捨てる方ではない。救いのわざに一旦着手した神は、最後まで導いてくださる。8 節後半にあるように「私たちの主イエス・キリストの日に責められるところがない者と」するまで、です。ここにコリント人たちに関するパウロの確信があります。多くの問題があるコリント教会であっても、救いのわざを彼らの内に始めてくださった神は必ずそのゴールまで導いてくださるという確信です。

ですからパウロは9 節で「神は真実です」と言います。他のすべてが不真実であっても、神はご自分を否んだり、裏切ったりすることはなさらない。その神がこれまで何をコリント人たちにしてくださったかをパウロは続けて述べます。まず「その神に召されて」とあります。ここに救いは神から始まったことが示されています。救いは私たちの決心から始まったものではありません。私たちが今日こうして信仰の道を歩んでいるのは私たちの行いに先立つ神の召しによるというのが聖書の教えです。そして私たちが導き入れられたのは「神の御子、私たちの主イエス・キリストとの交わり」であると言われています。神は私たちをどこへ召したかと言えば、それは主イエス・キリストとの交わりです。神はここに私たちの祝福のすべてを備えてくださっています。実にこのコリント書冒頭ではイエス・キリストという言葉がこれでもか、これでもかというほど出て来ます。振り返ってみると、何と 1~9 節までのすべての節に出ています！つまりコリント人の幸い、またコリント人について感謝すべきすべてのことは、イエス・キリストとの交わりにおいて彼らに与えられているということです。

ここから2つのことの今日の箇所のみとめとして述べたいと思います。一つは賜物についてです。今日の箇所ではコリント人たちに与えられた特徴的な賜物について触れられました。それは彼らが賞賛し、誇っていたものでもありましたので、それについては感謝の中に含めない方が良いのではないかという考えもあるかもしれませんが、パウロはそうしませんでした。むしろ彼はこうして、感謝は神に帰すべきであるという大事な真理を示しています。彼らはその賜物をもって自己満足し、自己主張し、自分に栄光を帰していました。しかしパウロはそれらは神によって与えられたものであって、彼らのすべきことはそれをもって自分を誇ることではない。彼らのすべきことは「神に」感謝することである！と彼らの心を正しい方向へ向け直してもらったわけです。私たちはどうでしょう。自分に与えられている賜物についてどう思っているで

しょう。それによって自分を誇っていることはないでしょうか。高ぶっていることはないでしょうか。自分の栄光に帰していることはないでしょうか。パウロは後に4章7節でこう言います。「いったいだれが、あなたをほかの人よりもすぐれていると認めるのですか。あなたには、何か、もらわなかったものがあるのですか。もしもらったのなら、なぜ、もらっていないかのように誇るのですか。」 私たちもこの視点をしっかり持つ必要があると思いま。私たちに与えられている様々な賜物はもらったものです。神がくださったものです。そうであるなら神に感謝がささげられるべきです。私たちは神の前にひれ伏し、神にすべての賛美を帰すべきです。私たちはこのパウロの感謝に教えられたいと思います。これを自分に当てはめて、自分に与えられている良きもののすべてについて神に感謝をささげ、それを御心に沿って正しく用いる者へ導かれたいと思います。

もう一つは真実な神の導きについてです。問題だらけのコリント教会を前にしつつ、パウロは、神は真実であり、彼らを最後まで堅く保ち、責められるところのない者としてくださると言いました。驚くべき言葉です。しかしこれが聖書の真理です。私たちも自分の罪に悩む者であり、こんな私では途中で脱落するのではないか、最後までたどり着けないのではないかと恐れるかもしれません。そんな私たちにも今日の御言葉は「神は真実です」と語っています。この真理の前では3つの応答があり得るだろうとある人は言います。一つ目は疑うという応答です。そんなことはあり得るだろうか。そうは言ってもそうならないのではないか。簡単に言えば信じないという態度です。二つ目は図々しい態度です。神が保ってくださるといふのなら後は安心だ。多少好き勝手な生活をして、神はそうしてくださるのだから、気にすることはないとする厚かましい態度です。もちろんこれは正しい態度ではありませんから、神はやがて厳しい懲らしめを与えるなどして、その考えを変えるように導かれることでしょう。正しいのは三つ目の態度、すなわち信頼する信仰に生きるという応答です。この神の約束にどこまでも信頼し、この約束に自分自身のすべてをかけて神に従って行くことです。「神は真実です」という聖書の教理は、まさに私たちを励まして、この応答を私たちから引き出すためのものです。

新しく与えられた2022年においても神は真実です。主イエス・キリストとの交わりへと私たちを召した神は、この方との交わりの中で私たちを最後まで導いてくださいます。色んな時が今年もあるかもしれません。困難な時、自分がかかりする時、

将来に希望が見えない時、……。しかしコリント教会を前にしてパウロが「神は真実です」と語ったように、私たちの前でも神は真実です。そのことを今日新たに心に刻んでいただいて、だからこそこの年もいつも神に望みを置き、キリストのもとでみことばに聞き入り、その交わりの中で豊かに祝される歩みへ導かれたいと思います。そして真実な神によって最後まで堅く保たれ、ついに待ち望んだ主の現れの日に責められるところのない者とされるというゴールに至る者として、そのように導いてくださる恵みの中を歩む者とされたいと思います。